史料紹介

国立公文書館内閣文庫蔵『愚記』——実量公記嘉吉三年記の翻刻——

川上一

国立公文書館内閣文庫蔵『愚記』（請求番号：古三-一六二）は、室町時代の公家、転法輪三条実量（さねかず）（一四一五～一四八三）の日次記である。実量は右大臣公冬の男。初名実尚、のち実教。応永二十二年（一四一五）生まれ。正長二年（一四二九）、十五歳で従三位に叙され、公卿に列する。その後、権大納言、内大臣、右大臣と累進し、長禄三年（一四五九）、従一位左大臣に至る。応仁元年（一四六七）に出家（法名禅空）。文明十五年（一四八三）十二月十九日に死去、六十九歳。後三条入道左大臣と号された。

転法輪三条家は、藤原北家閑院流の嫡流。清華家の家格を有する。代々有職故実に通じ、室町期にも『後愚昧記』筆者の公忠、その息実冬（公冬父）等、優れた故実家を輩出している。実量も家学をよく修め、在職中は節会内弁、除目の執筆等、朝儀の要職を歴任し、晩年は公家衆の宿老として一条兼良と並んで重んぜられた。「有職抜群之臣」[1]と評された彼の言談の一部は、『実隆公記』や『諸談部類』[2]所収の「禅府雑談条々」にみえている。

実量の日記は原本が伝わらず、国立公文書館に蔵される『愚記』が唯一の写本である。本書は実量の和歌詠草『愚詠草』との合写本で、すでに松原一義氏による紹介・検討がある。[3]このうち『愚詠草』については、氏の詳細な考証が備わり、後に『新編私家集大成』に収録、全文が翻刻された。一方で日次記部分『愚記』に関しては、紹介以降言及された形跡がなく、後述するような書写形式の問題もあり、利用するに不便な状態が続いている。本稿で全文を翻刻紹介する所以である。

『愚記』（実量公記）は、嘉吉三年（一四四三）正月一日から同年七月二十三日までの日次記である。実量、正二位権大納言、二十九歳の年にあたる。記事を欠く日も多く、半年に満たない記録だが、この年の実量は、元日節会の内弁を勤め（正月一日条）、また正親町三条実雅の白馬節会内弁の習礼（六日条）、当日の儀を見物・扶持したこともあり（七日条）、この間の記事はかなり詳密である[4]（但し一日条は冒頭を欠く）。それぞれが独立した元日節会・白馬節会の次第書たりえており、室町中期の朝議の実態を知る上で有用である。また七月条の記事は、室町殿足利義勝の死去と（二十一日条）、同母弟義政の相続の事に係る（二十三日条）。これらの経緯については『建内記』等により詳細であるが、例えば実量は、二人の母日野重子に対する義勝の弔問と、義政相続の参賀が同日となったことについて「今朝訪申、只今賀申、人間之体無レ定事也、大方殿（日野重子）所存如何、憂喜相交歟如何、事々短筆難レ尽者也」（二十三日条）と情感を交えて記している。一つの歴史的事象を同時代人が如何に捉えていたのかを知れる好例であり、当代の社会風潮を把握する上で参照の価値ある史料と思う。

最後に本書の書誌的事項を示す。国立公文書館内閣文庫本『愚記』（請求番号：古三-一六一）は、江戸後期写の袋綴一冊（二七・二×二〇・二糎）。押小路家旧蔵。現在は茶色無地の保護表紙が付されているが、[5]もとは本文共紙の仮綴であったと思しい（従って第一丁表が原表紙）。楮紙、全六十二丁（墨付き六十一丁）。保護表紙の左肩に貼題簽（子持ち枠）、「愚記」と墨書され、その下部に鉛筆書で「（転法輪）三条実量卿記〈筆者注・ママ〉／（紙背）実量詠草文明十三年奥書」と付記される。原表紙（現第一丁表）には、中央に「愚記嘉吉三」とあり、これが本来の外題であろう。なお右傍に「百三十七号」との朱書きがあるが、これは明治十九年（一八八六）、押小路家の蔵書が内閣文庫へ献納された折に作成された『押小路師成献納本書記類目録』[6]の整理番号である。第一丁裏（本来の見返し部分）には、「裏書／詠草近年分／一乱已前詠草悉紛失了」、第二丁裏には、「愚詠草」との内題があり、以降、見開きごとに『愚記』（日次記）と『愚詠草』（和歌詠草）が交互に書写されている（『愚詠草』は第四十七丁表まで）。祖本では日次記の紙背に詠草が書写されていたとみるべきだろう。

この他『愚記』末尾には、実量の叙位・除目での執筆担当年を記した小字の書付がある。文安・宝徳年間の事績もあり、後代の補筆であることは確実だが、実量本人のものであるかは判然としない。

本書は日次記と詠草とが交代で書写された特異な形式をもつ写本である。親本（祖本）のありようを留めるための措置であるが、通読には適さないため、翻刻にあたっては『愚詠草』部分を省略し、『愚記』のみを掲載した。

注

（1）『十輪院内府記』（史料纂集）文明十一年七月六日条。

（2）宮内庁書陵部柳原本『諸談部類』（函架番号：柳・三五八）。

（3）松原一義「三条実量の和歌の新資料の報告―内閣文庫蔵「愚詠草」―」（和歌文学研究52、一九八六・四）。以下、氏の論は全てこれによる。

（4）実量は三月にも県召除目の執筆を勤めているが、当日の記録は、別記に記したとあり現存しない（三月十四日条）。

（5）内閣文庫に蔵されて以降の処置であろう。

（6）国立公文書館内閣文庫蔵『押小路師成献納本書記目録』（請求番号：二一九―〇一五五）。

【付記】貴重な資料の利用をお許し下さった国立公文書館に感謝申し上げる。本稿はJSPS科研費（課題番号JP20J10292）による成果の一部である。

【翻　刻】

〔凡例〕

一、漢字は、原則常用の字体に改めた。

一、改行・補入については、原則追い込みとしている。

一、本文には適宜、読点（、）・並列点（・）を付した。

一、改頁の箇所は「　」を付し、丁数（アラビア数字）・表裏（オ・ウ）を示した。

一、人名や参考のための注記は、（　）を以て傍記、あるいは本行中に記した。人名注は原則各月の初出箇所に示した。

一、誤脱が想定される箇所は（ママ）と傍記し、内容が推定できるものについては〔　〕内にその旨示した。

一、ミセケチは、左傍に「〻」、右傍に訂正内容の形で示し、重書きは訂正後の文字を本行、訂正前の文字を（×）にて傍記した。

一、本文中に挿入される指図（図1・図2）については、原本の画像を利用した。

一、その他、適宜「〇」を付して注記を示した。

〔嘉吉三年記〕

（表紙）「愚記」（朱筆）

百三十七号

愚記　嘉吉三　予今年元日節会内弁勤仕也、（1オ）

除目執筆、予勤仕、但其間事不注此記、内弁事者委注載了、」

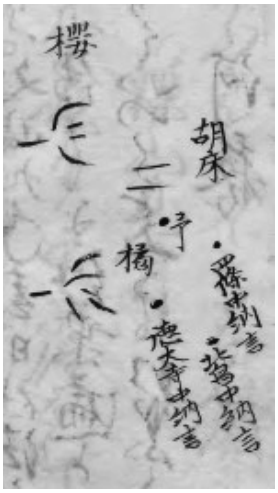
〔正月〕

〔一日〕（前欠）（三条実量）予答云、近年無此事、諸卿可着殿上之処省略、自由之儀也、予自高遣戸下殿於便宜之所着靴、関白出（一条持基）無名門着靴了、無名門前立蔀西被進立、依為仮列無揖、予引裾（ウシロ）進立、前駆直裾、次中御門（松木宗継）中納言以下次第列立、東上北面、公卿一列、其後殿上人一列也、至六位蔵人立了後、頭右中弁明豊（中御門）朝臣出無名門対関白、申次由也、関白一揖、頭弁答揖之後跪、依家礼也、入無名門申入之、即帰出一揖之間、関白答揖了、頭弁又跪、入無名門、自殿上沓脱下殿、加列」（2オ）之後、関白両三歩進出、対予小揖、予答揖之後、関白離列進行、随身相従也、次予又両三歩進出、対中御門中納言小揖、離列進行、関白練歩之間也、仍予聊停立、関白列揖之間、予進清涼殿東庭（更カ）支東ヘ徐行、進出西ニ列立、両三歩々出、又一両歩退立揖、次々公卿列立、公卿一列殿上人一列也、至六位蔵人悉列立了、関白以下舞踏了、自下臈次第退出、中御門中納言・予相残、大臣練帰之間、公卿」（3ウ）一両人相残定例也、但中納言以下退出、大納言残ニ、関白一揖、一両歩進出、向南練歩、早練也、但当家練ヨリハ聊遅也、関白練止之時、随身発前声、次予一揖自列前退、次中御門中納言退了、予自高遣戸堂上、即可向陣之由俊秀（坊城）相触之間、予又下殿、前駆（三善有統）・雑色等少々取松明前行、於宣仁門辺刷袖引裾入宣仁門、一揖脱沓、懸右膝、次懸左昇、自右膝起歩行、到我」（4オ）座程、先突左膝、次突右膝、次抜左膝、上首方也、一揖、直右膝、直下臈方也、引寄裾、直表袴、繻平緒、次中御門中納言着之、次四条（隆夏）中納言着之、陣座狭少之間、徳大寺中納言不着、参議持康（本書持季正期）・両人着了、職事俊秀、経公卿後就予座下仰内弁、詞云、内弁、予居向、南面、微唯、気色許也、職事退之間、予如元居直、東面、俊秀退入宣仁門之間、予退右膝下臈方膝、一揖、次退左膝、上首方、自左膝起、」（5ウ）経公卿後（ウシロ）、跪着沓、南面、左廻立向一揖、北面、右廻東行左ニ折テ北行、到我座程一揖、西面、懸右膝、次懸左昇了、直右膝上首方也、一揖、直左膝下臈方也、安座、西面、次居向端方、南面、直表袴、繻平緒了、引寄裾、右手持笏、左手引裾、以扇直之、置後方（ウシロ）、二尺許引垂也、宿徳之人皆引上云ヘ、当家雖納言、年齢卅余之時、引上也、次直沓、当家雖納言、年齢卅余之時、仰官人令直之云々、然者令敷軾之次、可令直之也、如元懐中扇正笏、召官人、二音、即参進、予仰云、軾、官」（6オ）人敷之退、又正笏召官人、即参進、予仰云、外記召セ、官人退、次外記清原業忠、参着軾、五位外記也、仍直着之、六位跪小庭、依目着軾、予問云、諸司ハ候哉、業忠申候之由、又問云、諸司ノ奏ハ候哉、業忠申候之由、此次予問云、外任奏ヤ候、申候之由、予仰云、持天参（マイ）レ、外記称唯退了、次外記持参外任奏、入莒在礼紙、予置笏於奥方、笏ノ手本ヲ少右膝ノ下へ指入也、引寄莒、以右手莒ノ丁ノ右ノ下ノ角ヲ取テ引寄、聊屈刷衣袖、披礼紙、於莒底披之、押折莒ノ底ニ置紙」（7ウ）ノ端ヲ為表也、高不取上乍莒底披見之、如元巻之加礼紙置莒底、取笏之間外記退了、次予正笏召官人、官人参進、予仰云、蔵人権弁奉行職事也、此方（コナタ）ヘ、官人退了、次権弁俊秀、来軾、予右手持笏奥方、左手端方、ニ天莒ノ右ノ下角ヲ取テ引廻テ、更莒ノ上方ヲ押遣之、文下方向職事、予仰云、奏フ、俊秀取莒欲退之間、予申云、諸司ノ奏ハ」（8オ）内侍所ニヤ、俊秀退了、暫俊秀返下外任奏、予結申、其儀予置笏、如先、引寄莒、聊屈天披礼紙、押折天置莒底、取上文於右腋（ワキ）奥方、披之、押合テ持廻天於前披之、又押合天合眼於職事、々々仰云、列ニ、予微唯、

気色許也、即引懸文端於左袖上ニ、聊令有音、如元巻之、加礼紙置莒底、取笏之間、俊秀仰云、諸司奏ハ内侍所ニ、若職事忘却者、内弁可尋驚云々、」(9ウ)俊秀退了、次予召官人召外記、業忠参進、予返下外任奏、(マヽ)押遣莒之事、以前注了、何略(脱カ)、業忠取莒欲退之間、予仰云、外任奏ハ列ニ、諸司奏ハ内侍所ニ、業忠称唯退了、清家外記不結申之間、如此仰之也、次居向奥方、西面、無行事之時如此云々、気色中御門中納言、是可出外弁之由也、黄門諸、即起座出宣仁門、次ニ公卿次第起座、了後予退左膝、一揖、次直右膝居廻天着沓、」(10オ)先右、了退右廻、立廻天一揖、西面、左廻南行、更西ニ折天西行、出宣仁門、不撤軾也、可見宣命・見参料云々、於宣仁門北腋着靴、前駆奉仕之、令押笏紙、但自家別ノ笏ニ押ス、密々令持之、取替了、是又一説也、為早速也、凡押笏紙事、六位外記押之、或前駆押之、(云カ)以官人令見出御之処、未出御々々、暫而出御之由官人告之、仍予入宣仁門、南ニ折天、宜陽殿壇上南行、着宜陽殿兀子、宜陽殿上廂第一間ニ立也、兀子西足当柱中央立之云々、而東出ス立之間、予仰官人令立直之、誤立之時如此、然内侍臨西欄之間、」(11ウ)予称唯、不出声也、立サマニ称唯也、閑ニ興笏首ヲ、当家必用此説、立了刷衣袖一揖、経宜陽殿壇上北行、入軒廊、不入作合間、入西第一間、出同間也、唯東二間可入云々、閑心刷衣袖、可練始之所等思案之、正笏閑歩出也、当殿坤角程練始、顧御殿方練始也、自右足練始也、西礼儀也、南ニ練行次第ニ南東ヘ練行天正東ヘ練行、到右仗南頭西礼儀也、練留、与胡床平頭、練留之後、一両歩退出」(12オ)東、又一両歩退立也、此時与胡床平頭、東西深揖、不垂面也、了退左足、或右足此時自然向艮也、再拝、常ノ拝ヨリモ閑也、了刷衣袖直平緒之後一揖、已上向艮、艮ヘ練出テ大輪ニ練帰、表衣欄(裏)当胡床、正西ヘ練歩、到練始之処練止、練留之後、聊笏ノ手本ヲ下テ徐歩、帰入軒廊、西第一間、南面ニ立天聊休息、顧来路、或此所可見次第也、刷袍袖昇堂上、傍南欄、先右足、入西面妻戸徐東行、入我座間、着納」(13ウ)言第一兀子、大臣兀子一脚有之、除之着也、一揖着之、自座下方立廻着之、引寄裾左手、正笏仰之、(云カ)開門仕ルカ、陣官人申開門之由、次仰云、(闕)園司ハ罷寄ヌヤ、暫園司着座之由申之、次召舎人、(東坊城益長)二音、近笏於口召之、故実云々、二音之間三イキ也、少納言就版之由陣官人申之、仍自座上方顧之仰云、大夫達召セ、少納言退、外弁公卿次第参列、異位重行、悉立了後、外弁上首以咳声可示之云々、不然、又」(14オ)陣官公卿参列之由申之、予仰敷乎、(弁)伺云、シキシ、顧之仰之、外弁公卿謝座謝酒了、堂上中御(マヽ)中納言端座、・四条中納言奥、・徳大寺中納言奥、此間入御、仍予以下起兀子磬折、内侍取釼璽退去之後、予以下復座、此間参議両人堂上了、予示正親町相公羽林云、餛飩、不供御膳之間、催臣下餛飩也、宰相中将有不審之気、仍予両三度雖示之猶不聞得歟、仍傍座之人示餛飩之由也、仍宰相中将欲起座之間、予仰云、乍座、仍相公羽林召内豎」(15ウ)処、中黄門云、南殿御後還幸之間也、暫可相待云々、(松木宗綱)此説可然哉否、其後内豎堂上了、相公羽林催餛飩歟、即内豎持昇餛飩悉居了、正相公羽林最末参議、申箸之間、予倚笏於台盤、笏ノ本在上、置箸於土器之上、此間中御門中納言早出、予取笏示相公羽林云、飯汁、相公羽林又催行之、飯悉居了、汁近年無之、又相公羽林中箸、仍予以下々箸、先取匕立外、次取箸立内、次予抜箸笏取笏見遣参議方示云、一献、即催行之、如元置笏、気」(16オ)色次人、端座人也、取盃、造酒正授之、左手持盤、是モ土器也、右手取盃如飲了、酒ノ残棄台盤了、雖無酒如此、奥座内豎巡行、一献了予抜箸取笏起、一揖下殿北欄、先右足、立軒廊東一間、南面、与柱平頭、以官人召外記、即六位外記参進、仰云、国栖奏、外記退、即帰参申云、国栖奏了、仍予堂上着兀子、一揖、引寄裾、即見遣参議方、仰云、一献、即二献、了予抜箸取笏召参議、」(17ウ)詞云、右近衛中将源朝臣、依有兼官召兼官也、(木造持康)源宰相中将起座来予後ニ、予顧之、如元北面ニ天仰云、大夫達ニ御酒給ヘ、源相公羽林取交名復座了、次予抜箸取笏示正親町宰相中将云、三献、即相公羽林催行之、一巡之後、予抜予抜箸取笏一揖、起兀子下殿、立軒廊、南面、令官人召外記、々々来、予仰云、立楽、外記催之、吹調子之間、予不帰昇直着陣、略儀也、乍着靴懸尻、

不揖也、右足在左足左地、予召官人、二音、即参進、予」(18オ)仰云、内記宣命持天参レ、官人退、内記持参宣命挿杖、予抜取之、以左右手抜之、右手上左手下、披見之、如元巻之置座奥方、取笏目之間内記退、予又召官人仰云、外記見参持天参レ、即外記持参見参、挿杖如宣命、予置笏抜取之置座前、見参二通也、先取上公卿見参、在礼紙、披見之、如元加礼紙置之、次取上非侍従見参、無礼紙、披見之、如元巻之置」(19ウ)之、公卿見参ノ礼紙ヲ少開天非侍従見参ヲ巻籠也、タトヘハ二通一礼紙ヲ巻籠也、了宣命并見参一度ニ取之給外記、令挿一杖也、宣命縦、見参横挿之也、次予取笏、不揖、起陣座進弓場奏聞之、外記持杖相従、進弓場立無名門代前、陣座ノ後、北第三ノ柱ノトホリヲ見合ヒ立也、職事俊秀出無名門、対予ニ立之間、予顧左方、外記進杖、予懐中笏、可指笏也、略儀也、取杖、即取直授俊秀、々々取之、入無名門奏聞、暫而被返」(20オ)下、俊秀授杖於予之間、予又懐中笏取杖給外記、即取笏気色之間職事退、予入軒廊、毎度出入西第一間也、進弓場之時、如此、外記相従入西第一間、東第一間南面ニ立、外記進杖、予挿笏於左腋、有口伝、見別記、抜取宣命、不取見参、之間、見参・再杖等外記持帰之、予取副宣命於笏堂上着几子、毎度起居揖、召宣命使、詞云、右近衛中将藤原朝臣、即藤相公羽林来予座後、予左端袖ヲ右手ニ」(21ウ)笏ニ取具シ天、自左袖下逆手ニ蜜々給之、文下向宣命使、宣命使如指笏ニ給之復座、予以下々殿、右使ノ後、橘樹ノ東南ニ北上東面立、異位重行、○コノ左ニ指図アリ、

（図1）元日節会指図



宣命使就版読宣命、予以下再拝、後段舞踏、宣命使堂上復座、予揖列ノ北ヨリ左廻シテ復座、予・宣命使両人之外不帰昇」(22オ)停立軒廊、是又定儀也、但略説歟、次予抜箸・匕、下殿、自軒廊経宜陽殿壇上南行、出中門、跪給禄懸左袖、上下居一拝了退出、于時天已明、

今夜参仕公卿、

予・中御門中納言宗継、・四条中納言隆盛、・徳大寺中納言公有、・御酒勅使北畠宰相中将持康、・正親町宰相中将持季、宣命使・雑事勤仕歟」(23ウ)

一抑参議所役事、節会以前陣儀先内々所示也、依可得其意也、今夜参議二人、仍下臈参議両役勤仕也、上首一役勤仕也、於雑事者最末参議定例也、凡参議一人之時三四ヶ役勤仕也例有之云々、

一雑事納言内弁之時、欲起座之時、下座ト仰之也、但一度ハ参議下殿、二度メヨリ乍座ト可仰之歟、然而猶自最初下座之由仰之、納言内弁」(24オ)之時可然歟、仍今夜如此所為也、

一二拝或舞踏之時、拝ノ数忘却有其疑也、仍誤三度又ハ一度拝ナトモ可有之歟、仍一度拝了伏地之時沙ニ一文字ヲ引之也、二度メニ二文字ニ成也、是今案儀也、可謂故実歟、毎時忘却之身有恐之故也、

一入御以後奉行職事向予云、御膳可供」(25ウ)歟、予答云、不可供、俊

秀云、腋御膳ハカリ可供歟、予云、不可然歟、俊秀云、此段不覚悟云々、予示云、御膳供畢サルニ入御之時残御膳供也、御膳以前入御之時一向不供也、俊秀諾退了、

一 後聞、今夜外弁参列之時、異位重行徳大寺中納言悪立云々、誠失錯也、二位中納言ニヲ(26オ)」メリ天立云々、尤不可然也、大納言ノ列後ニ可立也、此内裏不立標之間、可得意事也、本標之様、大臣・大納言・三位中納言・四位参議如此也、二位中納言ハ大納言ニヲメリ天立也、三位参議又三位中納言ニヲメル也、大納言ハ二位三位ヲ云ハス一列也云々、大臣又一位二位一列也、

宣命之拝之時者予列ノ後ニ立可然也、

（二行分空白）(27ウ)」

一 今夜四条中納言上首ノ兀子二脚除之着之間、下臈納言ノ兀子一向無之也、仍予密々示此趣之処、中御門中納言云、無納也(言)兀子之時、着床子例有之云々、此詞頗無詮、幸兀子二脚マテ上ニアリ、何不着上兀子シ天着下臈兀子乎、如案徳大寺中納言堂上之時、無兀子不便云々、仍四条中納言着改上兀子也、無我兀子之時、下殿於軒廊召二装束司弁一仰可立兀子由云々、先例也、

一 今夜端座　予・中御門中納言・北畠宰相中将・正親町宰相中将、(28オ)」奥座　四条中納言・徳大寺中納言也、

（一行分空白）

一 着端座之人入西面妻戸、着奥座之人入南面妻戸、定事也、

南座事也　北座事也

（五行分空白）(29ウ)」

二日 今日殿上渕酔歟、

三日 禁裏当番也、仍所参也、

四日 依禁裏御衰日叙位延引云々、今日佳例一門之輩来臨、有盃酌、

五日 六日 行向新大納言(正親町三条)実雅、亭、当年初所行向也、内々直垂始也、新大納言云、今日入御尤所」(30オ)畏申也、明後日内弁進退等、内々可習礼也云々、即新大納言着装束、陣儀習礼、於新造会所在此事、習礼之儀少々注之、

一 内弁着奥座之時、先懸右膝昇、

一 着端座之時、又懸右膝、

一 直沓事、先座下方沓直之、着沓事、先右足、奥端座同、

一 加叙事於端被仰之、或於奥座被仰之、早晩不定、然而近年儀大略於端座被仰之云々、仍自関白(二条持基)被遣次第、端座分載之」(31ウ)於端座内弁令敷軾之後、職事来軾作(脚)加叙者事、誰々可叙何位事体也、即下折紙、内弁取折紙、即申下々名、詞云、下名、職事自懐中取出下名給内弁、々々置座前取笏、職事退、内弁召官人令召硯、或参議仰硯事、目参議令着座上、外記硯於参議座前ニ置、内弁目参議、々々仰加叙者事、即給折紙、即又給下名、参議取之復座、摺墨候気色内弁、内々参議書之、其進退省略不注、書了取副笏参上、内弁取之折紙ニ見合天」(32オ)無誤之間取笏、参議退、内弁以官人外記莒一進之由仰也、下名入莒奏聞、或不入莒奏聞也、以下略之、加叙事自関白、新大納言代々関白被諷諫、被遣次第、予別紙写留也、仍省略之、悉見陣次第、其後召外記、外記奏等事如恒、

一 新大納言云、白馬奏事挿一杖哉、将又両杖歟、何様ニ沙汰乎、予答云、当家両奏ヲ一杖ニ挿テ奏聞也、新大納言云、大将左右ナカラ参之時ニ不及沙汰也、大将一人参之時、左右ノ奏ヲ一杖ニ挿」(33ウ)之時、左大将ハ左ノ杖ニ挿也、右大将ハ右ノ杖ニ両奏ヲ挿也、是依為我杖也、大将不参之時、内弁奏之時ハ挿左杖也、然間左杖ニ挿ヘキ条勿論也、然而我身為右馬寮之時、若可挿右杖歟如何、予答云、此条先規不覚悟、能々可被尋事也、

一　新大納言云、堂上兀子事、去年踏哥節会内弁勤仕、初度也、可着大臣兀子之由関白被示云々、此事予不知事也、凡納言内弁之時ニ除大臣兀子一脚ヲ、着納言第一兀子定事也、今度者除大臣兀子」(34オ)可被着納之(言)第一兀子歟、新大納言然者可談合執柄云々、納言着大臣兀子事、未聞事也、

一　召内竪(チサウラヲ)召様事、イサハラト召之、予先年白馬内弁勤仕之時、如此召之也、

一　予云、位記莒在大臣兀子前、仍納言内弁之時、我座ノ前ニ令置改之也、按察大納言(三条西公保)云、近年其(ソレ)マテモアルマシキ歟、先年洞院(実熙)大納言内弁勤仕之時令置直也、予所見物也、新大納言云、然者召誰人可置改乎、予答云、御後職事ヤ候」(35ウ)召天職事出現之時、蔵人ヤ候ト召之時、六位蔵人参進之時、位記莒可置改之由仰之、或御後ニ蔵人ヤ候ト召天仰之也、位記莒ノ緒解(トクル)之時令結(ムスフ)之也、習礼了為祝着有盃酌事、及晩予帰宅、今夜叙位也、執筆内大臣(花山院)持忠公也、莒文・公卿可尋注也、

七日

祝着之儀如恒、去夜叙位聞書未到之間、可叙(ミス)人(加級)早々存知大切之間、小折紙可写送之由」(36オ)内々仰大外記師郷朝臣、仍所写送也、披見之処、右府(鷹司)房平公、一品、伯三位(白川)雅兼(中原)、二品、四条宰相隆遠、正三位也、其外四位五位之間也、新大納言息生年三歳、名字公躬、去夜叙爵也、仍賀遣也、使治部少輔友長(源)也、家君又被仰也、自今朝雨雹降、寒嵐以外也、然節会内々直垂体ニ天可見物也、新大納言自兼日相構可見物、毎事自然事憑入之由示之間、」(37ウ)所見物也、及亥剋内弁参内、毛車、前駈両人・騎馬侍、布衣、等召具也、馳雑色六人歟、飛雹頻降、寒嵐無比類、丑剋内弁着陣、奥、相次中山中納言定親、・葉室中納言宗豊、・六条宰相中将有定、・四条宰相(鷲尾)隆遠、等着陣、四条新中納言(油小路)隆夏、不着陣直可向外弁座歟、依陣座狭少也、諸卿着了、職事蔵人左少弁(資重)、仰内弁事退了、内弁着端座、引寄裾直沓了、左手笏横持之、笏頭在左、右手以扇直沓、右召官人令敷軾、次召外記諸司・御弓奏・外任奏等事一度ニ聞之歟、」(38オ)外記持参外任奏、内弁披見之了目外記、不取笏也、外記退了過陣小庭之時、(清原業忠)内弁取笏、如此関白被教歟、次内弁奏外任奏、人招職先以官事奏也、此次御弓奏之、雨儀御装束等事内弁奏之歟、其詞不聞、職事退了、暫而資重返下外任奏、内弁引寄莒結申之、如恒、職事仰々詞、雨儀御装束等事勅許之由仰之歟、職事ノ詞曽不聞、資重退了、内弁召官人召外記下外任奏、外記業忠為清家外記之間、不結申之(アキマヽ)如此、」(39ウ)内弁仰々詞、外記持莒退帰了、次内弁以官人召弁歟、権弁俊秀(坊城)所(アキマヽ)散状弁也、参進、内弁仰雨儀御装束之事歟、俊秀退了、内弁起座、退入(出)宣仁門着靴、押笏紙、兼ヲ別ノ笏ニ押ス持之、聊直装束、(三条西実隆)按察大納言・予在此所、扶持内弁也、内侍臨西欄之間、内弁入宣仁門出作合間、入軒廊西第一間、於西階下指笏、昇階給下名、内侍授之、抜笏取副下名於笏、出軒廊西第一間、西ニ折天宜陽殿壇上南行、着兀子揖、兀子与柱頭立歟、召内竪(チサウラヲ)、二音、内竪参進、為雨儀之間、宜」(40オ)陽殿上南東軒ノ下立之也、内弁右方也、内弁仰云、式ノ(アキマヽ)省(フンノツカサ)・兵ノ(ツハモノヽツカサ)省召せ、内竪称唯退了、二省(丞脱カ)代、六位蔵人也、両帯弓箭、人進立、依為雨儀宜陽殿上南東軒ノ下、内弁召云、式ノ(フンノツカサ)省、指音召也、式省参内弁右ノ方ニ立也、如内竪、二弁兀子傍ニ、内弁下々名、次召兵省、詞云、兵ノ省、兵省参進、内弁下々名、二省共退入了、次内弁揖起兀子、退入(出)宣仁門了、待出御歟、令陣官令見之、既出御之由陣官人告之、内弁入宣仁門、此間外弁公卿起陣座歟、又着宜陽殿兀子、内侍臨西欄之間、内弁」(41ウ)称唯、立サマニ称唯也、一揖、了南ヘ両三歩々出東面一揖、依雨儀如此、再拝又一揖、畢北ヘ練行、宜陽殿上也、宜陽殿北第一間ノ北ノ柱ノ辺ニテ練留也、入軒廊西第一間、東面ニ天聊休息、

見次第昇西階、傍南欄先右足、於堂上兀子仰開門、次仰〔闕〕司、次下殿立
軒廊東一間、南面、雨儀若為西面歟如何、召外記歟、叙位宣命外記持参之、内弁
挿笏於左腋見宣命了、指笏取宣命挿杖、」(42オ)昇階南欄、入南面妻戸奏之、
即下殿、北欄先左足、取副宣命於杖、於軒廊於杖者返外記、於宣命者
取副笏ニ堂上、於堂上宣命懐中之歟、次内弁召内竪、二音、依雨儀立軒廊、内竪参進、内弁宣云、
式ノ省・兵ノ省召せ、次輔代参進、一人四位諸大夫也、自西園寺召進云々、一人内弁前駈也、両人名字不知、依雨
儀進立軒廊、可待召歟、入宣仁門不待召直参上、甚不敵也、又
可参之由内弁仰之歟、即帰参、式二合也、次兵省参進、内弁召歟如何、不聞、」(43ウ)於
軒廊式・兵莒以上三合令持内竪、輔代置莒於案之上也、依雨儀案中門南腋軒ノ下ニ立也、次内弁召舎人之間、少納言就版、依雨儀中ノ北腋ニ進立也、内弁仰云、刀
称召せ、少納言向外弁上首一揖了、外弁公卿参列、依雨儀一列也、中門ノ北腋北上東面也、
了内弁仰敷尹、自座下方顧仰云々、外弁公卿謝座謝酒了堂上、次二省引叙人
参列歟、不見、遅々之時内弁仰参議催之云々、次内弁召宣命使給宣命歟、宜陽殿土廂壇上、一段再拝一段
内弁以下々殿列立、宜陽殿土廂、依雨儀也、了宣命使就版、
舞踏、叙位宣命拝了宣命使復座、内弁以下次第復座、次叙人舞踏退了、軒
中門南腋軒下也、依雨儀也、次内弁以下々殿拝舞、宜陽殿土廂、依雨儀也、親族拝是也、内弁不堂
廊東一間ノ北ニ退テ立也、内弁ノ前ヲ経テ堂上也、
上停立軒廊、為奏白馬奏也、次々公卿次第復座、此間内弁猶在軒廊、次内弁奏白馬
奏、依無大将内弁奏之也、軒廊東第一間」(45ウ)南面ニ天見之、聊柱ヨリ少北ニ退テ見之、依雨儀
如此歟、若雨儀ハ西面ニテ可見
何、如見了両奏一杖ニ挿也、堂上、傍南欄入南面戸、書杖共ニ
不被返下留御前也、即出南面戸
下殿傍北欄、立軒廊、召外記催白馬歟、即堂上、入西面妻戸、暫白馬渡、
右右馬頭代雅豊朝臣・忠郷両人也、関白退出之間扈従、仍召返之間白馬遅々云々、入御以後之間、御膳不供之、仍臣
下餛飩四条宰相下殿催之、内竪持参之間相公復座、餛飩居了参
議箸申上歟、不見、」(46オ)次臣下飯汁内弁下殿催之、軒廊東第一ノ柱ノトホリニテ西面ニ立テ催之、若第二ノ柱ヨリ
聊東ヘヨリ天可立歟、内竪持昇之間内弁復座、参議申上箸等事、堂上之儀一向

一

予不見之、次一献、参議乍座催之、酒正内竪持昇之、次内弁下
殿催国栖、軒廊東第一間、南面、奏了由外記申之歟、次二献、参議乍座催
之了、次御酒勅使、六条宰相中将歟、慥不覚、次三献、参議又乍座催」(47ウ)之、次坊
家奏於軒廊見之、於弓場奏聞之、依雨儀陣ノ後ノ軒ノ下北第三柱トホリニテ奏之、書杖(杖)共不被
返下也、此間予帰宅、以後事不見也、于時天已明、

今日参仕公卿

新大納言内弁実雅・中山中納言定親・葉室中納言頼時・四条新中納
言隆夏・六条宰相中将有定・四条宰相隆遠、」(48オ)
弁俊秀・少納言益長朝臣也、東坊城(三条)
次将　雅豊朝臣・公久朝臣・新大納言猶子、実者弟也公綱朝臣・忠郷(阿野)・季遠(山科)・成任(阿野)、
其外猶可尋注、
抑阿野少将季遠今夜次将也、為内弁可致礼哉否事、舎兄実治朝
臣所相尋予也、予答云、或父子兄弟之礼、或家礼之礼等定事也、
新大納言与阿野只一家計也、若致礼者如」(48ウ)形之礼ニ天アルヘキ歟、
如此事者宜為所為者哉、又成任為内弁可致礼哉否事、内々尋予
也、予答云、此礼依加冠歟、先規不覚悟之由答了、
今夜叙人、式四条宰相・資重・俊秀・兵忠郷、以上四人歟、四条宰相為叙人之
間舞踏、了退入中門、了徘徊便宜所歟、親族拝了諸卿堂上之時、
入自宣仁門堂上可然歟、」(49オ)参議無人之間、直不退出而可堂上之由、
兼テ内弁仰四条相公歟、是召留儀也、不然者取位記舞踏、了可退出也、
叙人トハ去夜叙位ニ加級之人、今夜節会ニ参之人立叙列也、定事
也、内弁モ叙位ニ加叙セハ可立叙列也、先年右大将実熙(洞院)、于時大納言、
白馬宴内弁勤仕之時立叙列也、予所見及也、叙列拝了退入中門、
入宣仁門陣座ニ行、尻ヲ懸テ」(49ウ)着之、親族拝了後堂上也、四条宰
相可立叙列之間、外弁参列ノ拝ニモ不立也、於内弁者、臨期可

立叙列也、

一　階昇降事、

内弁昇之時南欄、（先右足、）降之時傍北欄、（先左足、予元日降時モ進右足也、）中山中納言昇降共南欄、四条新中納言（50オ）言再（并ヲ）四条宰相同之、葉室中納言如内弁、但降時先右足、（愚意同之、）」

一　六条宰相経列前加列、失錯也、見物侍臣微咲之、

一　内弁催白馬奏之時、以官人直催之也、此儀如何、以官人外記召せト仰天、外記参之時、白馬奏ト外記ニ可仰歟如何、

一　内弁催物之時、仰内竪之時、東第一ノ柱ノトホリニ天催之、如何、定有子細歟、予所存東二ノ柱ヨリ少東ヘ退天可立歟、」（50ウ）四条宰相催餛飩之時、如予所存イツレ可然哉、猶可尋知事也、

一　内弁出軒廊、経宜陽殿壇上之時、毎度不用作合間、出入西第一間也、若雨儀之時、随便可用作合間歟、猶如晴儀可出入西第一間歟、可尋知事也、位次公卿悉出入作合間也、

一　内弁為奏白馬奏停立軒廊、次々公卿経内弁ノ前堂上、四条宰相依立叙列入宣仁門堂上」（51オ）也、仍彼相公可堂上ヲ待天、相公堂上之後、南ヘ進出テ被奏、尤可然也、

一　雨儀之時胡床立様事、近年之儀、右ノ胡床ヲハ月華門ノ北ノ扉ニ東上南面ニ立之、左ノ胡床ヲハ日華門ノ北ノ床ニ西上南面ニ立之、今夜モ如此立之処、俄立改テ中門ノ内、中門ノ南ノ腋（ワキ）軒ノ下ニ北上東面ニ立之、若中山中納言如此可立改之由仰官歟、後黄門当世（彼カ）有識人也、案立様ナト大概絵図也、」（51ウ）

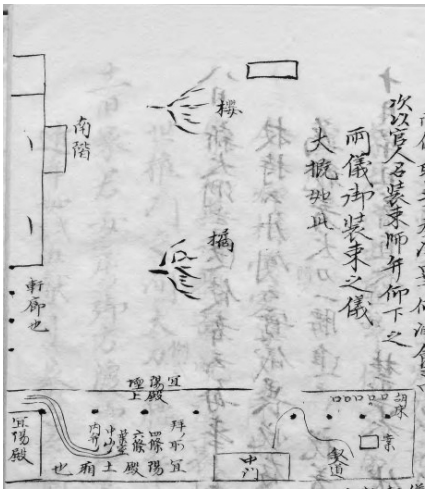
八日

雨儀不始以前雨降者、於陣座招職事、（奏外任奏次有便、）奏云、御装束雨儀ニ、職事奏聞畢仰聞食之由、次以官人召装束師弁仰下之、

十日

雨儀御装束之儀大概如此、（○左ニ指図アリ、）

（図2）白馬節会指図



（○以下ノ本文、指図ノ下段ニアリ、）儀始之後雨降者、降立軒廊招職事奏之、勅許之後召弁仰之、近仗在日月華門代宣命版、（置西中門溜内、）

内弁謝座儀、

内侍出居之時、立兀子前磬折、微唯更揖、兀子南サマヘ両三歩行留立、兀子南柱南頭、柱外簷内釼不当柱程也、

向東揖并拝、又揖左廻経宜陽殿前練行、立軒廊（入廊後不練、）昇殿、（少納言立西中門下、外弁公卿参列、）宜陽殿代柱内（北上東面、）宣命拝見揖」（52オ）

（三行分空白）

新大納言送使者云、毎事去夜之儀御扶持、云外聞云実儀、畏悦存也、先日又光臨、為祝着太刀一腰進（例式）云々、祝着之由返答了、

早旦着直衣（下結、）禁裏・伏見殿・室町殿等参賀了、室町殿参賀之人僧俗如雲霞、」（52ウ）未剋帰宅了、大炊御門前内府来臨、家君（信宗）御出座、（転法輪三条公冬、）予依窮屈不侍此席、有盃酌云々、今日卿相雲客少々来臨、予謁之、

家君無御対面、晩頭裏松(政光)入道来、当世権門之間、太刀(例式)一腰遣了、
十一日　家君・女房御方渡御(53オ)予方ニ一当年始也、近年如此、五献了家
君令帰給、如形引物」進了、比興々々、為表祝着之儀計也、
十三日　又家君女房御方渡御、是上臈(公敦母)申沙汰也、三献以後家君令帰給、
如此御引物進之、○コノ条、十五日条ノ後ヨリ挿入ス、
十四日　当番之間参内了、今日松ハヤシト号者有之、猿楽了、
十五日　祝着如恒、珍事々々、」(53ウ)
十六日　節会、内弁按察大納言(公保)、外弁中院大納言(通淳)・日野新大納言
(資広)・中御門中納言(宗継)・日野中納言(兼郷)・六条宰相中将(有定)・
北畠宰相中将(持康)等云々、自今日三日聖天供始行也、後聞今夜
弁教忠也、着外弁之処、中御門中納言咎云、何着外弁哉、非職
弁着外弁、職事兼帯之弁不可然云々、教忠云、何可依其哉、雖
職事兼帯弁者可着之由(アキマヽ)着」(54オ)外弁云々、彼黄門所存不可然歟如
何、
廿日　於台屋有盃酌、毎年儀也、予所行向也、家君・女房御方御座、
廿一日　行向新大納言亭了、
廿三日　千夜叉丸物詣(吉田・祇園・北野御霊等ニ)、女房(時房)又物詣、当年始也、女房語云、今日万里小
路大納言、吉田・祇園等社参、息男成房(万里小路)扈従云々、万里小路大
納言」(54ウ)衣冠、成房束帯云々、
廿四日　禁裏当番之間、参　内了、(為請取之間未明所参也)入夜当座哥在之、廿首、
(季・恋・雑)出題、飛鳥井右衛門督(雅永卿)也、雖無出御於番衆所密々所
詠也、人数予・四辻中納言(季保)・右衛門督(雅永)・(木幡中将)雅豊朝臣・
(法性寺侍従冷泉)為季朝臣・為富等也、」(55オ)及天明退出、
廿五日　東山遣迎院僧中(源空)龍房来、有談義、選釈集講之、毎月今日選釈集
講之、今日法然上人忌日也、此集彼上人作也、定有感応歟、
廿七日　自今夜結斎、自明日七ヶ日聖天供被始行也、」(55ウ)
廿八日　自今日聖天供始行之、去年冬季迴行、自今日所被行也、
廿九日　今日三種一客茶興行之、
(四行分空白)」(56オ)
(一行分空白)
三月
十四日　自今日被行県召除目、予可候執筆之由有催、再三故障申、雖然
更領状之仁無之、於今者若存知者、別而可為忠節之由被仰下之
間無所辞申、仍参仕」(56ウ)其間事見別記、
十五日　中夜(除書)也、予参、(如昨夜)
十六日　竟夜(魚書)也、予参、(如昨夜)
(一行分空白)
四月
一日　平座、上卿・参議・弁・少納言誰人哉、可尋記、
十七日　自今夕入精進屋、先之沐浴、明後日密々為参宮也、
十九日　密々以板輿直垂之体参詣神宮、羇旅之間、和哥詠之、野径山路
海辺、依有其興也、
廿五日　帰洛無為祝着了、初度参詣殊祝着也、
廿六日　右大将(洞院実熙)奏慶云々、自正親町宰相中将(持季)、亭出立也、依為陣家也、
扈従正親町宰相中将・殿上人両三人云々、○コノ条、一日条ノ後ヨリ挿入ス、」(57オ)
五月
(二行分空白)」(57ウ)
六月
(七行分空白)」(58オ)
七月

（二行分空白）

十三日　定法寺僧正（実助、予舎弟也）・真乗院僧都（公遍、予舎弟）・西室僧都（公顕、予舎弟）・予等申沙汰一獻了、家　君（転法輪三条公冬）・女房御方御祝着了、又今日管領左衛門督入道（斯波義廉）、以使者進菰於家君、御祝着了、」（58ウ）入夜帥大納言（実雅）・滋野井中将（実益）等参、申沙汰一獻、予自晩景霍乱以外也、仍不候此席也、伝聞、今日室町殿（足利義勝）御腹煩云々、

（一行分空白）

十六日　今日室町殿御腹以外云々、公家武家馳参、予所労之間今日不参、伝聞、去夜マ天ハ医師典薬頭（丹羽）頼豊朝臣進御薬、随少減之処、」（59オ）自今朝シュ阿弥・セイ阿弥等進御薬之処、以外増気、於今者珍事云々、驚入者也、邪気又有之云々、故一色大夫（義貫）・故赤松（満祐）入道等悪霊云々、不遑委記、

十七日　今日参室町殿、驚入之由申入了、

廿一日　今朝未明、室町殿已入死門給了、凡言語道断事也、（ママ）今朝十歳、去年首服了、老少不定之世、誰人成安思哉、可悲々々、今日為」（59ウ）復日、仍不申入大（日野重子）方（×了）殿也、

廿一日（ママ）　上臈局（室町殿号大上臈、家君御娘也）、室町殿自御年少之時奉扶持、仍今日落髪云々、着黒衣云々、

廿三日　為御訪参室町殿、申入大方殿、関（二条持基）白・左（近衛房嗣）府・右府（鷹司房平）等同被参謁女房、各帰了、又参大（正親町三条実子）御（正親町三条実豊卿ノ娘也）所（前大方殿ト申）、関白以下被参了、今日於管領家諸大名集会評定云々、是将軍仁体事談合云々、」（60オ）伝聞、烏丸（頭右中弁資任朝臣宿所事）若（足利三春、ノチノ義政）公（故室町殿御一腹也）、令治定云々、仍公家武家進太刀云々、仍予所参也、御対面、御歳九歳云々、令着平絹水干給、次参大方殿、珍重之由申之、今朝訪申、只今賀申、人間之体無定事也、大方殿所存如何、憂喜相交歟如何、事々短筆難尽者也、仍省略、入夜以板輿直垂之体」（60ウ）密々行向管領宿所、是不可然事也、然而於当世者将軍同事也、又家君多年御知音也、已後云、是密々行向也、内（否カ）府（花山院持忠公）、如予密々今夜令行向之由或者語之、但実跡難知（61オ）者也、

（三行分空白）」

（六行分空白）

○以下、後代ノ書付カ、

永享十一除目初度、廿五才、嘉吉三第二度、廿九、

文明（ママ）二叙位初度、卅一、宝徳四第二度、卅八、

于時内大臣」（61ウ）